

「実践事例集Vol.14」(2017年4月発行)で
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

種から花へ

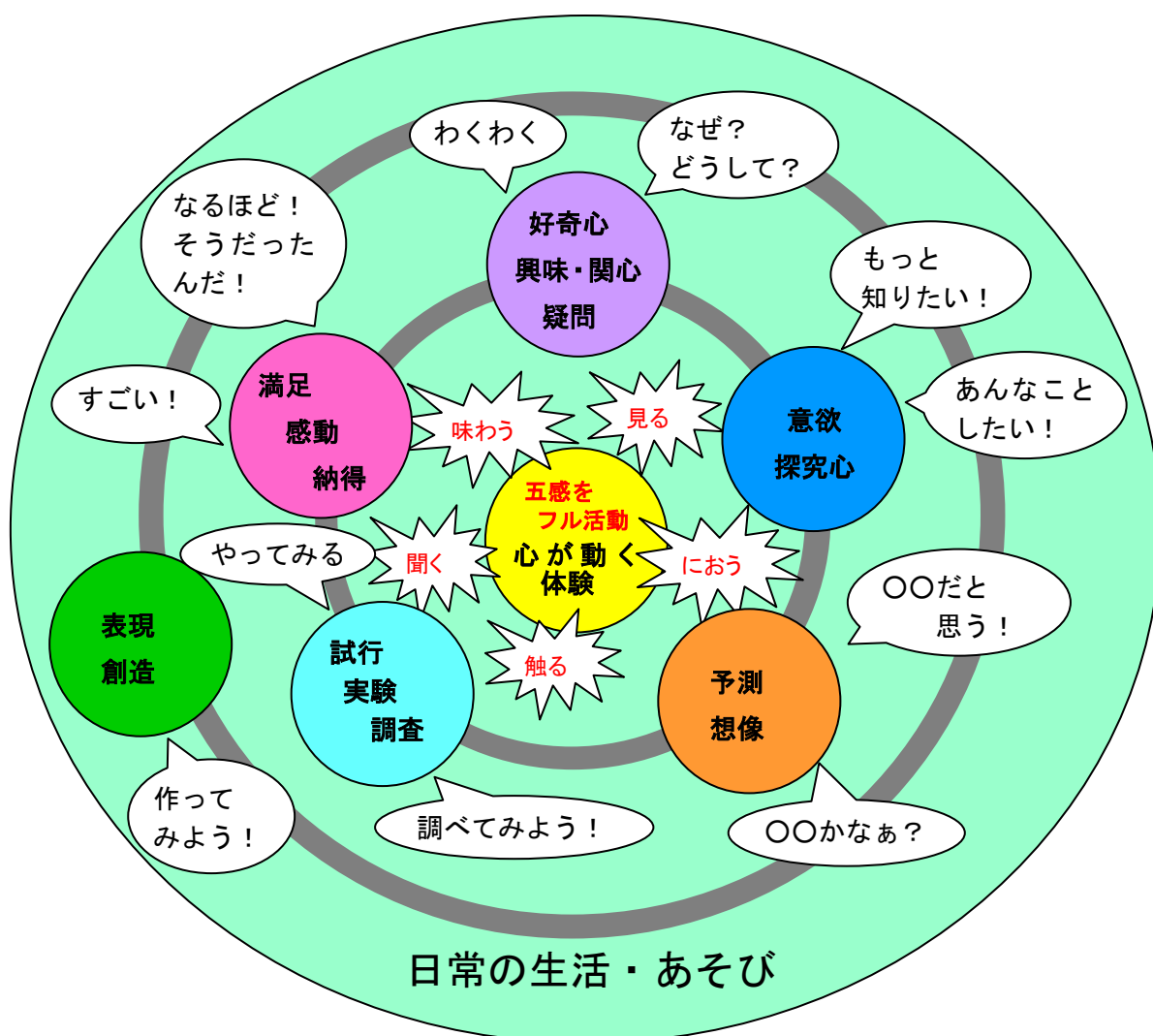
花から虫へ

～いのちのつながり～



1. 科学する心

子どもたちが主体的に生活して遊び、自然と触れ合う中で五感を最大限活動させて気づきがあり、興味・関心・疑問を持つことができる。友だちや保育者を交えて意見を言い合うことで一人ひとりの好奇心や探究心が芽を出し始める。同じものを見たり、聞いたり、触れたりしても感じることはそれぞれ違う。子どもたちは物事に予想を立てて、想像を膨らませたことを具体化しようと表現や創造することで心が動く体験を共有していく。友だちと役割分担をして、実験や試行を繰り返すことが子どもたちの満足感や納得に繋がり、次の「心が動く体験」になる。友だちと一緒に心が動く体験をし、またそれを取りまく心情を、「科学する心」と捉えた。



事例2 「虫ってどこに住んでいるの？」

(4歳児を中心とした 4月～9月)

年中組になり一つ大きくなったことが嬉しく、毎日張り切って生活している子どもたちは、自然に囲まれた環境の中で毎日元気いっぱい遊んでいる。

特に興味を持っているのが虫である。園庭や畑での虫探しに夢中になり、追いかけたり、触ってみたりする中で、虫はどこにいるのか、どんな場所に住んでいるのか興味を持ち始めた。

◎虫がいる所はどこかな？子どもたちから探してみたい場所を聞いてみることにした。

- ①畑 → 美味しそうな葉っぱがあるから
きれいな花が咲いているから
- ②園庭 → 落ち葉がいっぱいあるから
- ③中庭 → 小さい花が咲いているから
草がいっぱい生えているから

<保育者の気づき>
今まで遊んできた場所を思い出し、子どもたちだけで場所や理由など考えだすことができた。

①畑



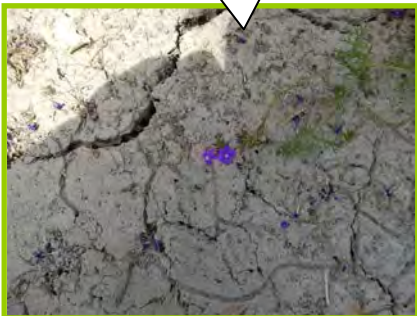
どんな虫が
いるかな？



葉っぱが食べら
れている！

アリはどこ行
くのかな？

何の穴？

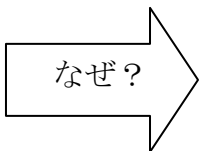


アリが入っ
ていくよ！

「畑にはどんな虫がいるかな？」わくわくしながら虫探しが始まった。「畑には土がいっぱいあるね」「ちょっと掘ってみよう」と虫を探してみると、たくさん虫が出てきた。

<畑にいた虫（土の中）>

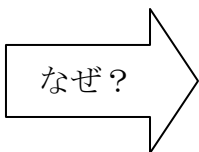
- ・アリ
- ・ハサミムシ



- ・土を掘ることができるから
- ・体が小さいから土に隠れているから
- ・大きい虫に食べられるから

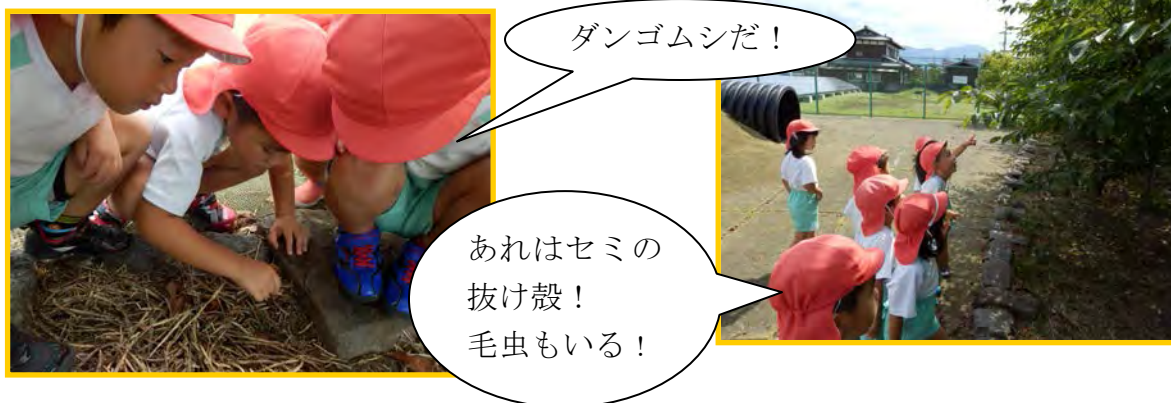
<花のところにいた虫>

- ・ミツバチ
- ・ちょうちょう
- ・トンボ



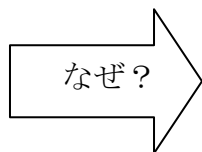
- ・花の蜜がたくさんあるから
- ・好きな食べ物が多いから
- ・花をベッドにして休んでいるから

②園庭 木の真下や落ち葉が落ちている所を探した。



<落ち葉の下にいた虫>

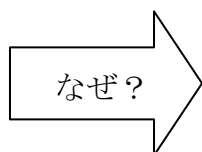
- ・ダンゴムシ
- ・ムカデ



- ・土に潜るために足がたくさん生えているから
- ・落ち葉を食べるから
- ・毒を持っているから(自分を守るため?)

<木の所で発見した虫>

- ・クモ
- ・毛虫



- ・足がいっぱい生えていて、木も登れるから
- ・クモは糸で家を作って虫を捕まえているから

③中庭へ 草がたくさん生えている周辺を探した。



バッタがいるよ。草と同じ色をしている。

トンボだー！



<中庭で発見した虫>

- ・ バッタ
- ・ カマキリ
- ・ コオロギ
- ・ トンボ

なぜ？

- ・ 草をいっぱい食べるから
- ・ 草と同じ色をしているから
- ・ 草がお布団になっているから

<保育者の気づき>

自分の発見や気持ちに共感してくれる友だちの存在が大きく、より仲間を意識したようだった。知りたい気持ちが高まり、行動に移す姿が頼もしかった。

様々な場所で虫の発見を楽しんだ子どもたちは、なぜその場所に虫が住んでいるのか予想し始めた。図鑑で調べたり、もう一度じっくりと虫を観察したり、わからないことは保育者に聞き、子どもたちなりの考えを深めていく。

ダンゴムシの足は10本もあるんだって！



ダンゴムシのご飯は落ち葉。

やっぱりダンゴムシの家は土の中だ。

「この足で落ち葉や土の中を掘って食べ物を探していたんだね」「ダンゴ虫が丸くなるのは他の虫から自分の身を守るためなんだね」など、予想していたことと、調べた結果を結びつける姿が見られ、新たな発見や驚きを感じていた。そして、調べる間に虫の特性について興味を持ち始めた。

虫の絵をかいて、わかったことをみんなに伝えよう。

みんな、
わかってくれる
かな？



できあがり！

すごいね！
この虫、見たことある！



身振り手振りで伝えるうちに、その虫になりきって遊ぶことに興味を持つ。「バッタはこうやって飛ぶよ」「トンボみたいに羽を広げて飛ぼう」「手を伸ばすと早く走れる！」新聞紙や広告用紙を使って虫に変身して遊ぶようになった。

クモの足を
作ろう！



大変身！



<保育士の気づき>

なりたい虫になるために、工夫を凝らし作り上げていく。特徴を捉え、虫になりきって遊ぶことで、より身近に感じられたようだ。「こんな動きをするんだよ」「こんな風に飛ぶんだよ」と自分たちで探し出した答えやわかったことを伝え合う喜びを感じていた。

事例3 「たねって不思議だね」

(5歳児を中心とした 4月～9月)

4月を迎え、新しいクラスで、一番初めに撮る集合写真は「桜の木の下で」が千代川保育園の毎年の恒例となっている。保育園の中で一番大きなお兄さん・お姉さんになったことに喜びや嬉しさを感じ、またドキドキと胸を弾ませ、これからの一年に期待を膨らませ笑顔いっぱいである。

自然の中で遊ぶことが大好きで虫探しや触れること、飼育、どれも夢中になってきた子どもたちである。また、自然に囲まれ過ごすことで視覚や触覚だけでなく、嗅覚や聴覚も研ぎ澄ませ五感全てをフル活動させてきた。

写真撮影をしている辺りに桜の花びらが散っていることに気がついた。



「桜いっぱい落ちてるな。」

「これお花の形のままだ。」

「花びらは、1、2、3、4、5。
全部で5枚ある。」

「全部で5枚」という一人の子どもの言葉は、周りの子どもたちの花を見る観点を変えた。「桜の花びらは5枚」ということに気づけた。

<保育者の気づき>

今までは花を摘んで「きれい」と見るものだったのが、花の種類によって花びらの枚数が違うのではないだろうか、他の花は何枚なのかという興味関心の対象へと変わった。

園庭に遊びに行くと、タンポポやシロツメクサ、ストロベリーキャンドルと様々な花が咲いている。花冠を作ったり、花束を作ったり、草相撲をして思い思いに遊び、草花に親しみを持ち、花びらの枚数に興味を持ったものの、タンポポ、シロツメクサ、ストロベリーキャンドルはどれも枚数が多く、なかなか数える気にならない様子・・・



すると、一人の子どもが家庭に持ち帰って
タンポポの花びらを数えてきてくれた。

タンポポの花びらは
184枚

タンポポの花びら184枚を一人で
数えた友だちに「すごい！」
「どうやって数えたん？」と
興味津々に聞く子どもたち。

じゃあ、次はシロツメクサをみんなで数えてみよう！



数える人数が増えることで、役割分担をする
ようになっていった。

デイジーを数えている子どもたち。



花びらの数え方

1. 花びらをとる
2. 画用紙に10枚ずつおく
3. セロハンテープで貼る

セロハンテープ
貼るよ



私、
10かくね

デイジーの花びらは
50枚

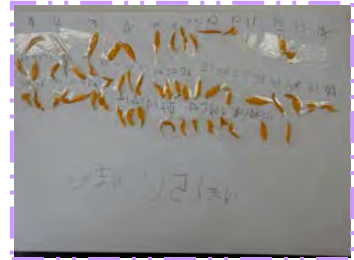


<保育者の気づき>

桜の花びらの枚数に着目したものの、他の花は両指で数え切れない枚数だということを目の当たりにすると、気にならなくなってしまった。しかし、その後の一人の子どもの行動力が他の子どもの花びらの枚数への興味に影響していった。

シロツメクサ、デイジー、ハルジオン、ひまわりも数えた。

シロツメクサ	→	44枚
デイジー	→	50枚
ハルジオン	→	80枚
ひまわり	→	51枚



数え方を工夫したり、園庭や家の庭から花を摘んできて数えてみたり、周りの花々に今まで以上に目を凝らすことで、初めての出会いがあった。

「痛いっ。」

「うわっ。トゲトゲしてる。」

「きれいな紫色や。」

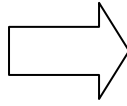
あざみの観察

保育室に戻り、図鑑で調べると「あざみ」であることがわかった。そこから毎日、観察を続ける。

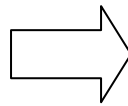




花びらから茶色いふわふわしたものに
変化し始める。



どんどん増えていき、周りの花も
茶色くなってきた。



増えたふわふわは今にも飛んでいきそう。触ってみると「種」であることが
分かった。



<保育者の気づき>

次第に変化していく、あざみの観察を楽しみにしていた。ふわふわの部分に触って観察してみると「種」だとわかり、タンポポの綿毛と同じ種類だと分類していた。

他にもこんな可愛らしいお花を見つけた。



図鑑で調べると「ネジ花」という名前があった。初めて見つけた、とっても可愛い花に大喜びの子どもたち。

「私も見つきたい」「どこにあるのだろう」と探し始める。

しかし、なかなか見つけれられない・・・

そこで、どこにどんな花が咲いているか地図を作ることをひらめいた。

地図を作ろう



ここは桜の木がたくさんあるね



私はストロベリーキャンドルをかく



これは地面に咲いている花だから茶色の画用紙

保育園にどんな花が咲いているか思い出しながら地図づくりが始まった。花の特徴を捉え、かき進めていくと、とてもカラフルで素敵な地図が完成した。次に、「木に咲く花」と「プランターに咲く花」と「地面に咲く花」の分別を試みる。すると面白いことが分かった。

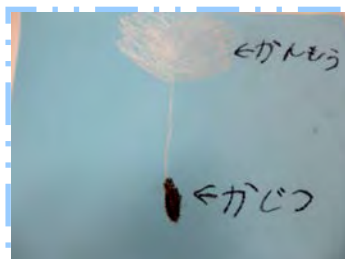


木に咲く花	→	1種類
プランターに咲く花	→	3種類
地面に咲く花	→	7種類

地面に咲く花の種類が圧倒的に多かったのである。その結果を受け、子どもたちが「何でだろう」と疑問に思うと同時に「種がいっぱいあるからや」という意見が飛び出した。

<保育者の気づき>
 子どもから「種がいっぱいあるからや」と発言があったのは、花びらの枚数を数える経験からだと思う。また、あざみの観察からは、花びらは種になることを知ることができた。

タンポポとあざみの種は風に乗って飛ばされ、たくさんの花を咲かすことができること、また、そのために綿毛があることに気がついた。



「タンポポは184枚やった」
 「じゃあ種も184個できるんや」
 「そしたら次の春は184個タンポポが咲くんや」と来年の春を迎えるのを今から楽しみにしている子どもたちである。

プランターの花や野菜は人間が種をまいたり、苗を植えたりして育てるのに対し、地面に咲いている花（野草、雑草）は自分たちで種を飛ばし、毎年たくさんのお花を咲かせていることに気づき、自然の偉大さを感じることができていた。

また今は、花びらが散った後のひまわりの観察を行い、秋にコスモスの花が咲くことを待ち遠しそうにし「花びら何枚あるやろうな」と予想をし、子どもたちの探究心はまだまだ続いている。

4. 考察

3歳児・4歳児は自然豊かな環境の中、虫との触れ合いが増える間にどんどん関心を深めていった。見つけることの楽しさや、虫に触れるようになった嬉しさ、動きの面白さに魅了されながら、虫になりきる子どもの姿が見られてきた。3歳児は捕まえた虫に対し、「お母さんに会えなくて悲しそう」「寂しいやんな」と虫の気持ちを考え出した。すると子どもたちは自然に返すのではなく「お母さん探し」を始める。その裏側には、折角、虫かごを作り大切にしていた虫を、手放すのは「嫌だ」という子どもたちの本音が隠れているのではないかと思う。虫と同一化することで生き物にも、同じ命があるということを実感し、命の大切さに触れることができた。同じ虫との触れ合いでも4歳児は特性を知りたいという気持ちが強く、予想を立てる面白さや調べたことを友だちに伝えることで情報を共有する楽しさを味わった。客観的に虫の観察をすることで虫に愛着を持つことができ、実体験を通して、小さな虫にも命があることまた、命の大切さに気がついた。

5歳児は、「桜の花びらは5枚」という一人のつぶやきから、様々な花に関心を広げ、枚数を数えることを楽しんだ。また花の観察をすることで「種から育つ花」ではなく「花からできる種」の存在を知ることができた。またその種から新たに花が咲き、命がつながっていくことに感動していた。子どもたちが3歳のときは一つのことを追及するのではなく、すぐに興味が逸れてしまった。しかし4歳児になるとカエルに興味を持ち始め、特徴を色々な角度から捉え、おもちゃ作りへと展開していった。秋はトンボを追いかけ、冬には氷や雪あそびをして、四季を通して様々な自然遊びを楽しむことができた。このような今までの経験があったからこそ、目に見えない命の存在に気づくことができたのだと思う。

5. まとめ

自然豊かな環境の中、虫との遭遇や触ってみたいという興味の芽生え、触れ合いを通して、命の大切さに気づくことができた。3歳児は虫にとって住みよい環境づくりをすることで虫に気持ちを寄せることができていた。知的好奇心が旺盛になり、何でも知りたがる4歳児は、疑問に思ったことに対し、予想を膨らませ、わかったことを友だちに言葉や絵を使って伝えようとした。5歳児は結果に辿りつこうと自分たちで方法を考え、工夫したり協力したりする姿がたくさん見られた。自分たちの身丈に合ったことを力の限り精一杯行い、結果に満足していた。

草花や虫などの自然物は、保育者が設定した玩具や遊びではないにも関わらず、子どもたちの興味をひきつけ、自分たちで遊びを展開していくほど不思議や発見が溢れている。また自然物と関わり遊ぶ中で、どの年齢も発達に沿って遊び込む子どもの姿が見られた。この研究を通して、何気なく遊ぶ姿から子どもの発達の特徴を捉えることの大切さを改めて痛感した。

私たち保育者は子どもの感性を伸ばし、ドキドキ・ワクワクを広げるための環境づくり、また自主性を大切にし、思う存分に試せる環境づくりをしなければならないと考える。そして、自分の命も、人の命も、動植物など全ての命を大切にすることができる心を育めるような保育を実践していきたい。

執筆者 金城 春奈・中川 由利子
小西 まどか・公庄 益美